

令和元年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第59巻8月号(通巻721号)

風土



冷酒やめよ竹の翁とならむには

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

昭和四十五年の「俳句」十一月号より桂郎師の『俳人風狂列伝』の連載が始まりました。その緊張の中で、次第に酒の量も増え、体力を消耗して肺炎になり臥せてしまいました。「一稿の口述寒し開戦日」と言う口述筆記の句もありません。翌年の夏ごろまで起き臥しを繰り返しながらも、飲酒はやめられなかつたようです。「竹の翁」は桂郎師のささやかな願望です。

ありがたや夏爐を前の茶碗酒

(句集『高蘆』より昭和四十六年作)

桂郎師はこの年に「奥の細道羽黒山全国俳句大会」の選者として招かれていました。この句の「ありがたや」は芭蕉の羽黒山での「有難や雪をかほらす南谷」を踏まえています。しかし芭蕉が難所の行者道を歩き、雪の残る南谷を拝したのに比べ、桂郎師は夏爐にあたたまりながらの茶碗酒です。桂郎師は芭蕉の労苦を重々承知しながら、私にとっては酒があがたいと呟くのです。

目 つ む り ゐ て 八 月 の 風 の 吹 く

(句集『貴椿』より平成十年作)

この句の前には「動かねば涼しくありぬ盆三日」があり、この「八月の風」は盆をも含んだ秋風であることがわかります。八月は原爆忌を始め、盆、さらに終戦忌と死を濃厚にイメージさせる月です。器師は静かに目を閉じて、父母や兄弟、亡くなった妻、そして桂郎師、また戦争で犠牲になった人々の魂の声を「八月の風」に聴いているのです。「八月の風」すなわち秋風は魂を運ぶ風でもあるのです。しみじみとした世界です。

五 合 庵 涼 風 放 つ 柱 かな

(句集『貴椿』より平成十年作)

この句は新潟の国上山の良寛の「五合庵」を訪れた時の作です。村の童たちを友とし、書や漢詩、和歌に親しみ、脱俗の暮らしをした良寛を慕つての旅です。『神威器集』(俳人協会刊)の自註によりますと、器師はこの時大雨にみまわれ、やっとの思いで五合庵に辿り着いたとあります。大雨が止むと庵の中から、良寛の魂のような涼しい風が吹いてきたのです。

水みくじ
南うみを

下賀茂神社 三句

はつなつのみたらし川の水みくじ

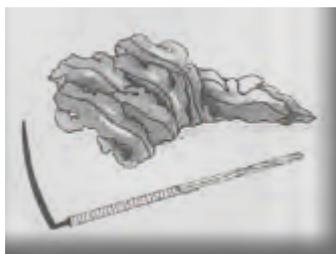
長明の方丈庵の蚊と申す

圧してくる糺の森の木下闇

老鶯のひびくばかりや和紙の里

野茨や棚田一枚づつ光り

あかときの雫を振つて蜻蛉生る
くちびるに指立て河鹿聴いてをり
みず垣におはすは権現さまの蛇
うき草のつひにおのれを盛り上げる
玉葱のつかの間の艶吊るしけり
水番のコンクリの畦よろけ来る
大鉢に躍るゑんどう剥きにけり



竹間集

同人作品



仏 舞 岩 木 茂

竹の葉のゆつくりと降る仏舞
筍を獺師のごとく提げ来たる
豌豆を剥くとしあわせ転げ出て
草刈ると鳥の巢があり卵あり
一言^{一言神社二句}で願ひは申せ時鳥
一言の常磐木落葉杉落葉
青梅の尻どつしりと五湖晴るる

蕨取り 小林輝子

熊除けの大声通す蕨取り
松籟とささやき交はす深見草
岩木嶺の天辺真白しじみ汁
二斤枿に天こ盛りなす蜆買ふ
夕焼のここだく砕けダムの面
くちばみの一升瓶に座禅組む
あつと言ふ間に茂る草老ゆる夫

アダムとイブ 田村すゝむ

退く気なし吾も蛙も一步前
咲き満ちて天地無用の白牡丹
落椿中の一つは器の句
桂郎の亀も蛙も鳴く頃か
声出せば熟れ柿の皮破れさう
りんご切るアダムとイブに真二つ
病名はパーキンソンてふ梅雨期来る

朝涼し

田中佐知子

明け易し隣部屋より話し声
橋立や蕪村の松の明け易し
天清和松の中なる御幸歌碑
朝涼し歌塚に松匂ふなり
樹々を洩る五月の光産盤
勅願寺声の涼しき案内僧
万緑や天へ反りたる檜皮葺

雷走る

中村洋子

雷走る火天風天自在天
自国天かつと目を開き緋の牡丹
磯岩のみな仏めく青嵐
麦の秋はちみつ色となりにけり
カラフルなスポーツ広場五月かな
戒名は傘雨大居士緑さす
みづからの重みとなりぬ緋の牡丹

花の旅

橋添やよひ

水奔る朽木溪谷夏兆す
葉桜の下恋みくじ娘が騒ぐ
飛び魚とび話途切れてしまひけり
虚子の忌の二度湯をつかふ花の旅
茎立ちやポツケに震ふ電子音
八重桜碑面あからむ比奈夫句碑
逝く春や炎に立てる青不動

豆ごはん

浅田光代

薫風やひとりに木椅子ひとつづつ
重なりてはんぎきの水くらくなる
いま脱ぎし竹皮径のど真ん中
薫風や撫でて小さき猫の骨
腹八分通せし父の豆ごはん
青蜥蜴電池残量あとわづか
空を掃く竹のそよぎも走り梅雨

令和の葉山へ

門伝 史会

万緑や改元月の葉山訪ふ

天草の干さるる艇庫全開す

特別拝観浄樂寺

運慶仏五体を蔵す寺若葉

礼拝の右うに繞よう三さん匝そう涼しかり

弥陀三尊やすらぎ灯す新樹光

躍動の毘沙門天像緑さす

夏の蝶如来開扉の堂出でて

前島密翁没後百年

郵便の父の墓前や黄菅咲く

長者ヶ崎令和の茅花流しかな
サーフィンの波のしぶきに見え隠れ
走り来て砂まみれなる裸の子
御用邸幹に威のあり松の芯
昼顔やおでまし門の木戸閉ざす
夏の海御成りの上皇夫妻待つ
昭和天皇皇位継承の地桜の実
展示さる上皇陛下のヨットかな
夕焼裕次郎灯台や一人思案の裕次郎
夏燕源氏森戸大明神ゆかりの総鎮守
頼朝も聞きたる波音蟹走る
歩き来し浜の長さや卯浪晴れ

山河集

同人作品



南うみを選

万緑に吞まれ出口を見失ふ
せめぎ合ふ若葉の風にたどろぎぬ
松本楼テラスに風とソーダ水
傘たたむ五月の匂ひ閉ぢこめて
園出でてビルの谷間の雲の峰

片桐紀美子

筍を獲物のやうに並べ置く
お清水しづみに沈め売らるる葛の餅
草笛吹くまつすぐな眼に見つめられ
満ち潮の舟屋に水母迷ひ込む
万緑や「語部の鐘」引けば鳴る

池田光子

著莪に雨阿弥陀浄土を作りけり
膨らむはみどりの畝傍勢ひあり
開帳の権現拜す山法師

上辻蒼人

水分の命の滝の飛沫浴ぶ
熊笹の色鮮やかに夏は来ぬ
蛇口より水噴き上がる青嵐
動くとは思へぬ空母薔薇開く
何やかや湧き立つてゐる夏野かな
丹の橋にまた降り出して緑雨かな
帆を張つて入道雲へ出港す

高橋まき子

中天へ朴の芯立つ観世音
薫風や脚ぶらぶらと背の稚
杉山のはたて卯の花明かりかな
みづうみの水面を白く走り梅雨
栗の花みだらなるまで咲きにけり

小原美美子

風土独語／南 うみを



万緑に呑まれ出口を見失ふ

片桐紀美子

「万緑」は見渡す限りすべて緑、真夏の草木の生命力の盛んな様を表します。「万緑の怒濤」とも言われますように、圧倒的な生命力に作者はたじろぎました。まるで樹海をさ迷っているような感覚に捉われ「出口を見失ふ」と口に出たのです。

口をよくまはる子でありつばくらめ

池田 光子

この句は子供と燕との取り合わせになっています。子供と燕に直接関係性はありませんが、「口をよくまはる」が二つを結び付けています。燕の鳴き声を想像したら解ります。まるで早口言葉のように鳴き交わす「つばくらめ」とよくおしゃべりする子がここで重なります。どちらも元気な楽しい世界です。

水分の命の滝の飛沫浴ぶ

上辻 蒼人

「水分」は山から流れ出る水が分かれるところで、そこには大抵神が祀ってあります。作者の住むところを考えると吉野水分神社でしょうか。この水が田畑を潤し、人々の暮らしを支えているのです。作者はそれを「命の滝」と呼び、飛沫を浴びつつ掬ぶの

です。自然の神々と一体化しようとする作者の心性が伝わります。

出来たての塩まだ熱き栃若葉

佐藤やすこ

「塩」は水と共に人間の命を支える大切なものです。さて作者は釜で炊く製塩を体験しようです。一握りの塩を作るのに、どれほどの労力が必要なのかを「まだ熱き」で実感しています。「栃若葉」も塩作りのまわりの景色に溶け込んでいます。

何やかや湧き立つてゐる夏野かな

高橋まき子

「夏野」は先ほどの「万緑」と違って、いろいろな草が生い茂り、緑深く草いきれの立つような野原です。作者はひたすら「夏野」を見つめ、「何やかや湧き立つてゐる」の言葉を得ました。大掴みなのですが、青世の群生が起伏を作り、灌木が風に騒いでいる様子を想像させます。

盛り付けの器に贅や夏料理

山田 健太

「夏料理」の本意は涼しさにあります。それは素材であり、盛り付けであり、器が演出します。作者は中でも「器に贅」と、高級な器を惜しげなく使うところに本意があると言いつつ切ります。

栗の花みだらなるまで咲きにけり

小原芙美子

「栗の花」は盛りになると、葉の上に覆いかぶさるようになり、いかにも重たげな様子を見せます。また梅雨の頃なので独特の匂いが漂います。その様子をエロチックに「みだらなるまで」と表現しました。

風土集



南うみを選

筍の包丁ぬきさしならぬなり 岩出 池田 光子

口のおくまはる子でありつばくらめ
子どもらに追ひ回さるる蜥蜴かな

下校児の列に乱入熊ん蜂

薫風や洗ひたてなる耕耘機

塩焚きの戸口に幣や若葉風

出来たての塩まだ熱き栃若葉

その奥に光りつつ降る竹落葉

甲塚古墳によるけ青嵐

会議終へゆりの木の花満開に

つばめの子尾をつき出して糞落とす

玄関に青梅ふたつころがつて

母の日のなかなか暮れぬ厨かな

退職の妻のエプロン聖五月

盛りつけの器に贅や夏料理

いわき 佐藤やすこ

水戸 山田 健太

若葉風少年母の背丈抜く 横浜 山森みちよ

そら豆を空に向かひて飛ばしけり

緑さす松本楼の列につく

解散は茅花流しの日比谷かな

二胡の音の風に乗りくる麦の秋

奥旨亭

横浜 佐野つたえ

躑躅咲く献木の道歩きけり

雲海や傍聴席より見る議場

四人なる議場の清掃汗拭ふ

休会の登院ボタン卯月かな

赤絨毯延べ四キロや西日射す

早苗取る父母若し朝ぼらけ

誕生の一升餅負はす立夏かな

薔薇の庭白より咲きてアーチ成る

クレマチス透垣に揺れ蔓の先

滑川 折田 京子